

銘文から見た鏡の歴史

銘文について、永田英正氏によれば、『器物に刻したり、書いた文字。器物製作の由来や祈願頌徳の文、製作者や製作年などが記されることが多い。また金属器に刻したものを金石、石に刻したものを石刻または石刻文両者をまとめて金石文ともいい、銘文といえど金石文を指すように考えられがちである。これは金石に刻したものの以外は滅びやすいために、実見しうる銘文の中では金石文が大部分を占めているからにほかならない。したがって金石文が銘文のすべてではなく、泥板の文字や甲骨の文字なども銘文であり、その他有機物に記されたものでも残る場合がある。銘文は、考古学的には年代決定の基礎となるほか器物の用途や性質についての知識を提供するなど重要であるが、とくに文献史学の研究では絶対的な史料価値を有する。甲骨の文字が古代中国の殷王朝の存在を立証したことは、その最たる一つである。日本でも最近では鉄剣などのさびた銘文をX線で解読する技術が進歩し、古代史の解明に大きな期待が寄せられている。』

（改訂新版 世界大百科事典より）

銅鏡に刻まれた銘文の歴史を知ることによってそれぞれの鏡式が鑄造された経緯や歴史的背景を解明する一助となる。

鏡 種	銘 文	出土遺跡（収蔵館）
蟬蟻文鏡	大楽貴富 千秋万歳 宜酒食 大楽貴富 千得所好 秋万歳 宜酒食 (内圈帯) 内清賢以昭明 光輝象夫日月 心忽 (外圈帯) 揚而顧忠 然謹塞而夫泄 懷靡美之窮繼 外承繼之可說 慕竊寤之靈泉 願永思而母絶	
草葉文鏡	見日之光 天下大明 見日之光 長母相忘 見日之光 長業未央 日有薰 宜酒食 長貴富 樂母事	
日光連弧文鏡	見日之光 天下大明 見日之光 長母相忘	
昭明連弧文鏡	内清賢以昭明 光輝象夫日月 心忽揚而顧忠 然謹塞而夫泄	
清白連弧文鏡	潔精白而事君 忽險難之身明 煥玄籍之流澤 恐疎遠而日忘 懷靡美之窮繼 外承繼之可說 慕竊寤之靈泉 願永思而母絶	
四神規矩鏡	尚方作鏡真大好 巧工刻之成文章 左龍右虎辟不祥 朱鳥玄武順陰陽 子孫備具居中央 長保二親崇富昌 壽飲金石如侯王今 尚方作鏡真大好 上有仙人不知老 渴飲玉泉飢食漿 浮游天下放四海 壽如金石為國保 新有壽銅出内陽 和以銀錫清且明 左龍右虎主四彭 朱爵玄武順陰陽 王氏作鏡真大好 上有仙人不知老 渴飲玉泉飢食漿 浮游天下放四海 壽如金石為之國保 杜氏作鏡四夷服 多賀新家人民息 胡塵珍滅天下復 風雨時節五穀熟 長保二親受大福 伝吉後世子孫力 官位高 始建国天風二年作好鏡 常案富貴莊君上 長保二親及妻子 為吏高遷位公卿 世々封傳于母窮	
重列式神獸鏡	吾作明鏡 幽深宮商 周麗容象 五帝天皇 白牙單琴 黃帝除凶 朱鳥玄武 白虎青龍 君宜高官 子孫蕃昌 建安十年造大吉	
連弧文日有喜鏡	日有喜月有富、樂母事常得意、美人會羊瑟侍、賈市糧萬物平、老復丁死復生、醉不知醒旦星	福岡県飯塚市立岩遺跡
連弧文（内行花文）精白鏡	清白而事君、志治之合明、玄之流澤疏遠、而日忘美、外丞、可說、思而無紀	福岡県春日市須玖岡本遺跡D地点
内行花文鏡	之光、天下大明	福岡県糸島郡前原町三雲南小路
重圈獸帯鏡	見日之光、天下大明、以昭君王、而四方、長業未央	佐賀県唐津市大字柏崎田島遺跡
流雲文縁方格規矩四神鏡	銘節「尚方作【歷博集成56には「佳」とある】鏡真大好、上有仙人不知老、渴飲玉泉飢食漿、浮游天下（下）（放）（四）（海）、徘徊名山採芝草、壽如金石之國保兮」方格内「子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥」	佐賀県唐津市桜馬場遺跡
尚方作銘方格規矩四神鏡	尚方作鏡真大巧、上有仙人不知、渴飲玉泉飢食漿、浮游天下放四海、壽如金石為國保（紐處に十二支あり）	福岡県糸島郡前原町平原遺跡
方格規矩四神鏡	青龍三年顏氏作鏡成文章左龍右虎辟不詳朱爵玄武順陰陽八子九孫治中央壽如金石宜侯王	京都府峰山町・弥栄町大田南5号墳
面文帯神獸鏡	景初三年陳是作口口之保子宜孫（口は言ベンに名）	大阪府和泉黄金塚古墳
斜線盤龍鏡	景初四年五月丙午之白陳是作鏡吏人口之位至三公母人口之保子宜孫壽如金石兮（口は言ベンに名）	京都府福知山市広峯15号墳、（阪大考古資料館蔵鏡）
三角縁神獸鏡	吾作明鏡真大好 上有仙人不知老 渴飲玉泉飢食漿 不由天下至四海 樂未央 年壽長保子宜孫兮 陳氏作鏡真大好 上有仙人不知老 君宜高官 保子宜孫 王氏作鏡真大明 同出徐州刻鐘成 師子辟邪其嬰 仙人執節坐中庭 取者大吉業未央 新作大鏡 幽律三剛 配德君子 清而且明 銅出徐州 師出洛陽 彫文刻鏤 皆作文章 左龍右虎 師子有名 服者大吉 長宜子孫 吾作竟自有紀 辟去不羊宜古市 上有東王父西王母 令人長命多孫子 吾作明鏡緣取 同文章皆成師基工 上有東王父西王母 宜子孫保甚大好 不由天下至四海 渴飲玉泉飢食漿 千秋萬歲不老兮 景初三年陳是作鏡自有經述本是京師社地出吏人位至三公母人口之保子宜孫壽如金石兮（口は言ベンに名） 正始元年是作鏡自有經述本自前師社地命出壽如金石保子宜孫	奈良県河合町佐味田宝塚古墳 【三角縁神獸鏡固有の銘文】 静岡県磐田市新豊院山古墳 岡山県湯迫群車塚古墳 滋賀県野洲郡當波古墳 【三角縁神獸鏡固有の銘文】 奈良県河合町佐味田宝塚古墳 【三角縁神獸鏡固有の銘文】 静岡県磐田市新豊院山古墳 岡山県湯迫群車塚古墳 島根県加茂町神原神社古墳 群馬県高崎市柴崎古墳、兵庫県豊岡市森尾古墳、山口県新南陽市竹島古墳
平縁神獸鏡	赤鳥元年五月二十五日丙午造作明鏡百齒潔服者富貴長業未央子孫蕃昌可以昭明 元康二年八月二十五日氏作鏡（以下判読不明）	山梨県八代郡鳥居原孤塚古墳 兵庫県宝塚市安倉高塚古墳 伝京都府相楽郡上狹古墳

第1表 中国出土鏡と日本列島内出土鏡の銘文比較

第1表で蟠螭文鏡から重列式神獸鏡までは中国での出土鏡銘文で、連弧文日有喜鏡から尚方作銘方格規矩四神鏡までは漢鏡2期から4期末頃の北部九州出土鏡銘文、以下はそれ以降の日本列島内出土鏡銘文の一例。

『長宜子孫』銘は、内向花文鏡、夔鳳鏡、獸首鏡、四神鏡、獸帶鏡などの後漢鏡からの転用。

『天王日月』銘は、三角縁神獸鏡のうち獸帶四神四獸鏡に多く、獸帶内の方格に入れられることも有る。

『上有仙人不知老』銘は、四神鏡、獸帶鏡、画像鏡からの転用。

『王喬』銘、『赤松子』銘は、画像鏡、獸帶鏡からの転用。

『尚方作竟佳且好 明而日月世少有 刻治今守悉皆右 長保宜孫子 富至三公利古市 告後世』銘は、画像鏡に多く用いられ三角縁神獸鏡には稀である。

『吾作明竟 幽律三剛 銅出徐州 彫鏤文章 配徳君子 清而且明 左龍右虎 伝世右名 取者大吉 保子宜孫』

『新作大竟 幽律三剛 配徳君子 清而且明 銅出徐州 師出洛陽 彫文刻鏤 皆作文章 左龍右虎 師子有名 服者大吉 長宜子孫』

『惟念此竟有文章 売者老寿為侯王 上有申鳥在中央』

『吾作明竟甚独奇 保子宜孫富無訾』

『吾作明竟絲取■ 同文章皆戚甚師甚工 上有東王父西王母 宜子保孫甚大好 不由天下至四海 渴飲玉泉飢食棗 千秋万歳不老兮』などの銘文は三角縁神獸鏡固有の銘文とされ、銘文中に『同（銅）出徐州』、『師出洛陽』と言う銘文がみられる。

類似の銘文では福岡県井原鏡遺跡出土鏡（江戸時代以前の出土で現鏡は所在不明）銘に『漢有善銅』銘があったとされている。

三角縁神獸鏡の造鏡者は前代の由緒ある『漢有善鏡出丹陽取之為鏡清如明 左龍右虎・・・』銘に習い、鏡の正当性を誇示したものと考えられる。

また、『陳是作鏡 自有経述 本是京師 杜地命出 吏人□之 位至三公 母人□之 保子宜孫 寿如金石兮』（□は言偏に名）は、三角縁神獸鏡のうち、景初三年銘鏡（島根県神原神社古墳）及び正始元年銘鏡（兵庫県森尾古墳）の銘文は景初三年銘画文帯神獸鏡（大阪府黄金塚古墳）や景初四年銘盤龍鏡（京都府広峰15号墳）と類似のものである。

三角縁神獸鏡の銘文には文意の通らない意味不明なものが顕著。これは鏡の意匠からくる文字数の制約による省略や宛字が著しく、前代の鏡式の吉祥句を取捨選択して鏤めた【形】を整えただけの鏡であることがわかる。

また、図像に関しても前代の図像や他鏡種からの転用など、寄せ集めの感が否めない。

三角縁神獸鏡には精緻な造りのものを中国から搬入した「舶載鏡」、やや粗雑な造りのものを国内で鑄造した「仿製鏡」または「倭製鏡」と称する説がある。

鏡の鑄金技術という実験的な知見からすれば、これはむしろ原型鏡により近い型(一次范)を使用したものと、数次の踏返しによる型くずれによる結果と見ることもできる。

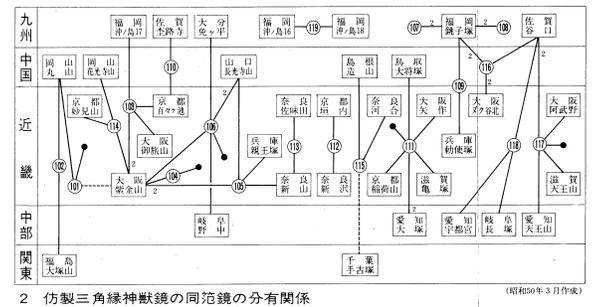
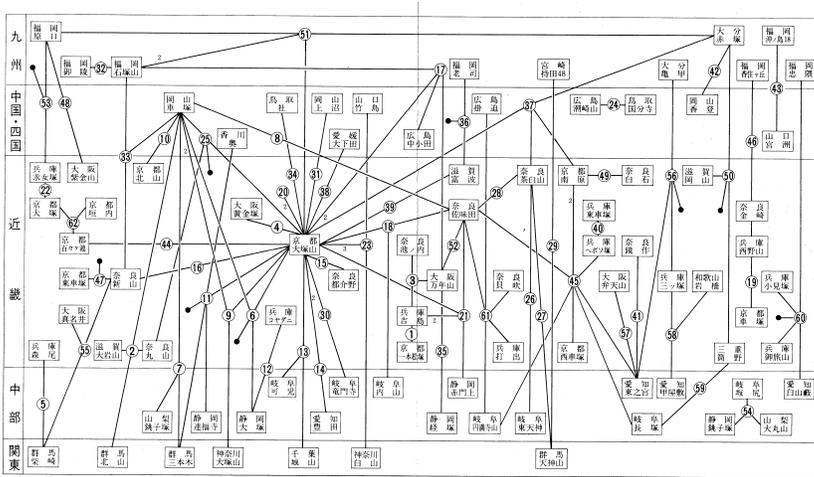
後の時代の海獣葡萄鏡のように同じ型の鏡が中国と日本列島双方で所在が確認できれば「舶載鏡」説も証明できるが現状は確認できていない。

特定の首長が多鏡種のにわたる范元を掌握してそれぞれの范型で鏡を铸造させ配布するという非現実的な歴史的根拠を見出すことは困難と言える。

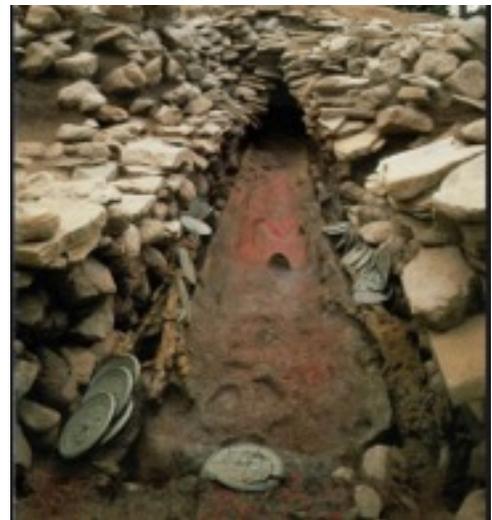
同じ型から造られた鏡の分有（同范鏡）関係についても、同盟もしくは連携する首長による葬送時の儀礼的献鏡行為と見なすことも考えられる。

つまり特定の集団ごとのお抱えの范元に献鏡を発注した結果多種の型から铸造された鏡が集まる結果となったと考えた方が理解しやすい。

奈良県黒塚古墳に見られるように画文帯神獣鏡が埋葬施設内で頭部付近に置かれるのに対し、三角縁神獣鏡は棺の外側に並べる慣習があることは多くの古墳の調査の結果周知の事実となっている。



頭部付近に立てられた画文帯神獣鏡



埋葬施設内の鏡の出土状況

